

# 明治二四年の真宗大谷派改革運動

——龍華空音を起点として——

川口 淳

はじめに

明治期以降の真宗大谷派の教団改革運動については、いわゆる白川党の明治三〇年前後の運動と、「精神主義」の系譜に連なる同朋会運動の二者に対して研究の焦点があてられることが多い<sup>1)</sup>。しかし白川党の運動はかれらの独自の信仰と政治思想を源泉とし、それを基礎として展開したのであるうか。他の改革思想や改革勢力が何もないところから立ち上がったものなのだろうか。現在、それらの点は必ずしも明確ではない。ならば、白川党以前の改革運動に焦点をあてることによって、先行する改革論を白川党がどのように批判し継承したのかという点、または、なぜ白川党が失速し改革運動が挫折したのかという点についても、イメージを持ちうるのではないかと考える。

15

本論が焦点をあてるのは明治二四年の大谷派改革運動である。<sup>2)</sup>この改革運動は龍華空音<sup>りゅうけうおん</sup>（一八二五—一九〇三）という一人の学僧から始まる。龍華空音は文政七（一八二五）年五月七日、尾張国海東郡神守村の養源寺に生まれ、

嘉永六（一八五三）年一月には尾張国海西郡早尾村の常德寺へ入寺した。明治の平民苗字必称義務令（一八七五）により、養源寺は神守姓<sup>（3）</sup>、常德寺は龍華姓を名乗った。龍華の名前は有名ではないが、清沢満之を育英教校入学に導いた人物としても知られている<sup>（4）</sup>。

龍華らの改革運動の特徴としては、僧侶だけではなく門徒が多く参加した運動であったこと、また、多くの人間がかかわり全国的な運動であったこと、宗門の運営のために門徒と僧侶の議會を開設することを主張したことなどがあげられる。興味深いのは、白川党の運動で須要な主張点であった門徒・末寺の議會開設による宗門寺務の人事や財政の透明化を促す主張が、明治二十四年の段階ですでになされていることである。

龍華は明治二三（一八九〇）年一二月、篤信の門徒伊藤春太郎と改革党「得明会」を組織する。伊藤春太郎は政治家であり、日刊新聞『時務日報』を発刊していた。その新聞が龍華らの改革組織の主張を拡散する媒体であった。龍華らの運動の広がりをおそれた本山の告訴により、龍華は警察に逮捕されるが、その後、無罪放免で出所し、運動は全国的にも知られるようになっていく。この運動に共鳴した人物や組織として、欧米仏教の紹介者である佐野正道や北陸協會をあげることができる。一方で改革派に反対する顕光会や、龍華らと違った改革論を展開する新改革派が登場した。

得明会は、明治二四（一八九一）年九月、京都において全国改革党大会を行い、そこで本山へ提出する改革請願書の内容、提出する期日を議論し決定した。しかし、その一ヶ月後に発生した濃尾地震によって、運動の母体である龍華の地元には甚大な被害がもたらされ、龍華の自坊も全壊した。本論では、この明治二十四年に高潮を迎える改革運動をできるかぎり時系列にそって描写し、それによって白川党以前の改革運動的一幕を提示したい。

## 一、龍華空音と改革党「得明会」の発足

龍華の日記から改革運動の夜明けを描写してみよう。明治三年九月三〇日、龍華は名古屋駅より汽車に乗り、京都東本願寺へ向かった。龍華が安心の不正であると考える占部観順が一等学師へ進級したことへの不服を本山寺務所へ申し立てるためである。

龍華と占部の因縁は明治一三（一八八〇）年にまで遡る。一三年、龍華は、占部の著書『改悔文講弁』（明治一一「一八七八」年）を初めて手に取り一読し、「異義不正の書」である疑いを持ち、一三年一一月に本山寺務所へ『改悔文講弁』の絶版と依用不可を出願した。<sup>(5)</sup> 本山寺務所は、龍華の主張を聞き、その旨を本山機関紙『配紙』において報告することを約したので、龍華は安堵して尾張へ帰国したが、しかし実際には『配紙』にその旨が掲載されず、かえって『配紙』に記されていたのは、自らの一等教授免職という職務差免の結果であった。<sup>(6)</sup> それどころか、占部は三等学師を進めて二等学師へと進級していたのである。本山寺務所の口車にのせられた龍華は書面において数度本山寺務所へ伺いを立てるも返答はなし。さらに明治一四年二月には占部の『改悔文略解』が本山教育科の蔵版となる。龍華は出版人の細川千巖へ数十回にもおよんで逼り遂に『改悔文略解』は絶版となったはずであった。しかし、占部は明治二年には一等学師補となり、着実に宗学者としての道を歩み、占部の著書も結局は教育課の蔵版として、本山御用の書としての役割を果たすようになっていった。

明治二三年に視点をもどす。一〇月一日龍華は京都から帰寺後、本山寺務への不服の詳細を書面により一六日付けで寺務所執事渥美契縁へと提出した。すると、本山寺務所は龍華のように寺務に対し意見するものを「不敬の書を差出」すものとし、罰する対象として考えたのである。<sup>(7)</sup> それを耳にした龍華は、本山寺務の宗義安心の精査が踏

まえられていない、陰湿な賞罰への憤りがさらにつのつた。占部に関する人事、または、寺務所の集金が末流の宗義安心の振興へと全く還元されていないという事実も、その原因は寺務役員の専横であると龍華は考えた。さらに深刻な問題として、長年の寺務役員の専横によって、本山の財政寺務は不透明となり、財政の紊乱をきたしていたのである。龍華が改革運動で主張した財政の開示、末寺や信徒の議會を成立させるべきであるなどの、後の政治的要求は、長年、不実な対応を受けた龍華の、腐敗した本山寺務という認識から生まれてきたのである。端的に言えば、龍華の運動を喚起させたのは、本山の腐敗そのものであった<sup>(8)</sup>。

明治一〇年代後半の本山は、日本第一といわれた数百万円の大負債を抱え、その困窮のなかで本山は、法義相続、本廟護持のための「相続講」制度(明治一九年)を考案した。明治二〇年代当時も、相続講は本山の経済的基盤の重要な一端であったが、その相続講についての次のような寺務職員の言葉を龍華は日記に書きとめている。

師恩は報じ<sup>(9)</sup>。古へ堅田の源右エ門は命をすてて師恩を報ぜり。命と金と何れが重きや。金よりも命の重きこと知へし。其重き命をすてて源右エ門は師恩を報ぜり。今や命をすつるに及ばず。善知識負債に困難し玉のゆへ金を惜まず上納すべし<sup>(9)</sup>。

龍華には、このような言葉は「倭弁を飾て翁媼を勧誘<sup>(10)</sup>」しているに過ぎないと感じられた。なぜなら、本山は明治一七・八年頃から財政困難となり、全国に周旋人を送り貸主を困らせ終に多くの貸主に借金を半額に減させ、貸主は甚大な損失を被ることになり首を吊るものもあらわれたことを、龍華は実際に知っていたからである。龍華は、善知識の名を借りて美言を飾るのではなく、本山寺務そのものが変革されなければ、何も変わらないと考えて、

「寺務所の改正なくんば本山自滅なり<sup>(11)</sup>」という主旨の書面を、一〇月一六日付で渥美契縁に宛てて陳述したのである。

一月六日、この陳述によって、龍華は本山誹議という罪に問われ、住職差免、本局用掛り役務差免、五等学師の称号褫奪の処分を受けた。寺務所の改革は書面による陳述では到底、変えることができない。むしろ処分を受けるのみである。そのことを痛感した龍華は、終に寺務改革を提唱し、運動に乗り出していく。僧侶だけの改革運動ではない。門徒と共に行う改革運動であった。日記には「同(※一一月)廿二日中島郡清水村伊藤久三郎において初めて寺務改革の演説をせり。其日より病床に臥して充分の演説する能わす。三日四日して平野伊藤方へ移る。同卅日平野村伊藤春太郎方にて病中ながら少々演説せり来聴人殆と二三百名なり<sup>(12)</sup>」とある。病中ながら伊藤久三郎方において初めて改革を唱え、数日後、平野村の伊藤春太郎のところで演説し、すでにそこでは二、三百人の来聴者が生まれている。

一二月一九日には「得明会」という改革運動組織ができあがる。龍華は日記に、その改革組織の「得明会趣意書」、「得明会規則」を認めている。ここに登場する伊藤春太郎は愛知県議會議員(常置委員)として活躍しており、政治家としても尾張で有名な人物であった。春太郎が改革を主唱する門徒の中心的役割を果たすことになったのである。龍華らは得明会の発足後、中島郡、海東郡、海西郡、美濃、名古屋など殆ど毎日演説をして回った。また得明会趣意書を数千枚印刷して全国に広告した。しかし明治二四年三月四日、ついに龍華は警察の取調べを受けることになる。寺務役員長谷靈測が、運動の全国的展開をおそれて龍華を被告に取り誹毀罪を警察に告訴したことによる。

日記には「矢留警察所より巡查来り拘引状を渡す。依之矢留警察所にて警察部長より取調べ同所に一泊して五日夜名古屋監獄所へ矢留より護送せられ未決監に入る<sup>(13)</sup>」とあり、五日より二七日の無罪放免まで拘留施設での日々を送

る。その間伊藤春太郎らは龍華の出所に尽力した。

二七日、無罪出所。寺務所が龍華を告訴するという画策は、寺務所側からすれば裏目にでた。かえって、運動を強化させてしまったのである。

龍華は出所後名古屋前塚町の得明会仮本部に宿し、翌日自坊早尾村の常德寺へ出発した。自坊までの道に、本田村、勝幡村、津島などで出迎えの人は多数にのぼり、数千人に及ぶ大行列の凱旋となった。自坊のある早尾村に着く頃には、数万といっても過言ではない人々が列を共にしていた。<sup>(14)</sup>無実の罪の幽閉という事実が、龍華をカリスマ化し、万に及ぶ人々に迎えられるという状況が発生していた。もともと龍華の存在は布教師としても学僧としても尾張のなかで有名であったということもあるが、やはり運動が尾張の真宗門徒のなかにすでにかなり認知されていたということをその事実が物語っている。伊藤春太郎は日刊新聞『時務日報』を発行していく。それが運動を一般に認知させる役割を果たしたと考えられる。

## 二、伊藤春太郎の『時務日報』発刊と得明会の主張

運動の主要人物となった伊藤春太郎の人物像と春太郎の日刊新聞の発刊を取り上げてみたい。春太郎は、安政五年三月二五日中島郡平野村に生まれた。<sup>(15)</sup>春太郎は、明治三年より同七年まで儒者、江間錦江の私塾に入り、さらに引続き、明治一〇年五月まで同塾の門外生として勸学を修めた。明治一年よりは宮田普通水利組合議員に当選すること七回におよび、その他の各種議員や委員等幾多の役職を歴任した。明治二四年および同三二年には中島郡会議員に、明治一七年、同二年、同三年、同四〇年に愛知県会議員に当選し、地方自治発展に寄与した。明治二四年時は県議員の傍ら、本山改革を龍華と共に切望し、運動の主要人物として活躍した。

明治二四年五月一五日の新聞『新愛知』によれば、龍華や春太郎らは日刊新聞を発刊していた。

今度龍華空音、伊藤春太郎、庄林一正等の諸氏が発起者となり当市に於て本月二六日より時務新報と云へる日刊新聞を発刊することとなり主筆は曩に日本新聞に在りし國友重章氏にして山崎重太郎石原烈等の諸氏も記者として編輯に従事すべく（以下略）<sup>(16)</sup>

この記述の『時務新報』はおそらく誤記であり、『竜華空音日記』には春太郎の発行紙として『時務日報』が何度も出てくる。<sup>(17)</sup>『時務日報』という新聞が、春太郎らの仲間の政治的主張や、本願寺改革を主唱する新聞として機能したことを物語っている。その新聞の所在は確認できていないが、興味深い人物は、龍華、春太郎の外に、発起人の庄林一正という人物と、主筆の國友重章である。

庄林一正は、下級士族に生まれ、維新後は大須観音の境内などで仲間を集めて興業撃剣を披露していた。自由民権運動が盛んになると自由民権運動家、内藤魯一は、庄林の撃剣会を足掛りに交親社という組織を拡大した。やがて内藤の組織とわかれ、庄林は「愛国交親社」をつくる。驚異的なスピードで尾張から東濃の農村に組織を広げ、愛知、岐阜県を中心に広範囲にわたって貧農や都市細民が組織に加入し、社員約二万八千人を数えた。しかし明治一七年の愛国交親社員による自由党員傷害事件をきっかけに、愛国交親社に対する弾圧が強化され、治安を妨害するものとして、ついに解散を命ぜられた。<sup>(18)</sup>

明治二四年にいたるまでの日本の出来事として、明治二二年の日本最初の経済恐慌、明治二三年第一回総選挙、第一回帝国議会召集という民権運動の一応の一段落がある。このようななかでの自由民権思想の宗教界への波動と

いう側面をうかがわせる興味深い人物が庄林一正である。この庄林という人物がもっていた人脈基盤と運動の拡大は無関係ではないと思われる。しかし庄林一正あるいはその関係のものが改革運動にある程度関与していたことについて、必ずしも報道の評価は高くなかった。壮士風の男たちを連れているということは、過激な豪傑流の改革とみられたのである。<sup>(19)</sup>

次に、國友重章についてである。國友は明治二〇年後藤象二郎の大同団結に賛同、官を辞して国粹紙『東京電報』(同二年『日本』と改題)の記者となり、同二年大隈重信の条約改正には対外硬派として強硬なナシヨナリズムを主唱したとされる。明治二五年には『東北日報』の主筆を務めたとされるので、その『日本』と『東北日報』の間に、愛知にて伊藤春太郎らの『時務日報』の主筆者となった可能性が高い。ただ國友重章が改革運動に参加したかはわからない。龍華や春太郎は上記の人物らと『時務日報』を発刊し、それが改革運動論を拡張・展開する役割も果たしたと考えられる。

『時務日報』で展開された主張の具体例として龍華が筆を執ったものが『竜華空音日記』に残されている。その記事のなかで龍華は本山寺務の体制を批判した。龍華の日記には「大谷派本山の危急を論じて全国門末兄弟に告ぐ」というタイトルで『時務日報』の第五、八、一一号に投稿した文章が記される。その文章は箇条書きで要点を示し論述するという形式で書かれる。ここに箇条をあげると、「財政紊乱」、「布教の不振」、「興学の失体」、「役員の専横」、「地方の不振」、「末門の不平」、「本末の関係」、「本山改革の急務」である。<sup>(20)</sup>

要約するならば、役員の専横の弊害が、本山寺務所内部の腐敗という形であられ、それが財政の紊乱につながる。そのような寺務は末寺や信徒に沐浴して内部改革をおろそかにしている。またそれが寺務の布教や興学に対する無関心さを生んでいるという批判であった。



この訴えが単に一人の発言ではなく、多くの有志者、門徒の共感を呼び、『時務日報』や他の新聞雑誌の報道によって知れ渡っていった。龍華らの主張は末寺・門徒の潜在的に持っていた不満を代弁したのである。

また日記に記される龍華の改革主張で注目したいのは、「執事等を大臣に准し憲法の如きものを作り当僧侶議員、信徒議員を国々に於て遷擧して会議開設す<sup>(21)</sup>」という要旨の演説をしたことが認められることである。要するに、龍華は執事の専横政治をやめて、末寺だけではなく門徒が参加した議員を、それぞれの国ごとに長期的な議員とならないように交代しながら選出して、会議の開設をすべきであると考えたと読み取れる構想をしたのである。そして得明会の『時務日報』の主張や新聞雑誌の報道、春太郎らの奔走の甲斐あり、運動は全国的に知られるようになっていった。

### 三、欧米仏教の紹介者、佐野正道の共鳴

ここでは視点を変えて、京都において欧米仏教を紹介する雑誌『欧米之仏教』を発行していた佐野正道の、改革運動への共鳴を取り上げてみたい。佐野正道は、大阪府西成郡勝間村の生まれで、少年の頃より漢学を学び、一五歳の時、京都育英学校に入り、英漢数学、東洋哲学を修め、一八歳で退学、帝国大学に入る志願で東上し、入学準備中の明治十一年には『英語節用集』を出版した。それが転機となり、帝国大学入学という目標を変更し、社会的な活躍を早期に実現することを目指した。大阪へ戻り東洋館と称する書肆を立ち上げ、洋書販売、書籍出版に着手した。南条文雄の『東洋哲学』を英訳するなどの功績がある。明治二十二年には神智学協会会長ヘンリー・ステール・オルコット大佐の来日に、平井金三、野口善四郎（復堂）らと関わる。その時に通訳を務めた人物に清沢満之の名があげられる<sup>(22)</sup>。また後に野口善四郎は清沢の『宗教哲学骸骨』を英訳することになる。

明治二二、三年頃より、佐野は『欧米之仏教』の編集発行に尽力する。寓居を京都下京区鷺尾町に置き、そこで雑誌発行に従事した。『欧米之仏教』はオルコットなどの海外の執筆物を日本語訳して紹介するという雑誌であった。しかし雑誌の第三号、第四号辺りから性格が変わってくる。<sup>(23)</sup>

ここで龍華の日記を見てみよう。日記には佐野正道と龍華の交流が記録される。また『欧米之仏教』第四号の編外付録からの引用と考えられる文章が記されている。

△去る二月の初の此京都寄留の佐野正道より雑誌並書状を郵送せり已後屢々書を以て交際を結ぶ。五月廿五日左の書を印刷せり。

『欧米之仏教』編外付録

伊藤春太郎と佐野正道主幹の盟約

伊藤春太郎氏は愛知県会常置員にして頗る仏教篤信の名士なり。氏は彼の大谷派本願寺に於て宗学者を以て名ありし龍華空音師の同山積年の弊惡を排除せんとするの企に関し尤も熱心に又た尤も誠実に奔走助力せり。而して氏は今回の運動をして将来一層の活大を謀らんとて各地有力熱心の護法家に同盟を促かし佐野主幹に屢々書を寄せ共に相ひ読せんことを申込まれ去る廿四日来幹の旨を報し越されたりしも主幹佐野は館用にて大阪に趣き居りたりしを以て則ち同地に於て面晤せしに氏等か今回の運動は曾て主幹佐野か懷抱せる持論に符を合するか如く其議を同ふせしを以て将来厭くまで相結託し共に運動せんことを約したり。猶將に龍華空音師よりも主幹佐野へ書面を以て同盟を申越されたり。付ては同氏と運動の事実及び現今大谷派本願寺々務改革の急務にして等閑に附すへからざる主旨は次編に之を評論すへし。

發行人 大阪平民 佐野正道<sup>(24)</sup>

ここに、龍華、春太郎、佐野の三氏の本山改革への関わりを知ることが出来る。また佐野は龍華らの改革をかねてより懐いていた持論とも符合するように意見を同じくして、結託して共に運動することを約束したと書かれる。そのことを証明するかのように、雑誌『欧米之仏教』第五号、第六号はほとんど、本山改革雑誌へと変貌していた。『欧米之仏教』第五号(明治二十四年七月二十九日)には、「大谷派本願寺有志諸氏に告ぐ」という改革有志者大会議を京都で開催する旨を告げる広告が掲げられる。また記事としては「大谷派本願寺改革有志者大会議」、「東本願寺(承前)」、「大谷派本願寺改革有志者の大運動」という具合にかなりの量が改革運動の記事に費やされていた。

『欧米之仏教』第六号(明治二十四年八月三〇日)になると、「大谷派改革有志大会議」、「大谷派本山寺務改革は最早や社会の与論となる」、「大谷派改革党の要領」、「大谷派改革党の勢力」、「得明会員の改革演説」、「大谷派本山寺務員と東洋新報」、「寄書○大谷派総会議開設を賛成し併せて得明会の設立を祝す」、「報告」というタイトルでほとんどの記事が改革を論じるものであった。

注目すべきは多々あるが、「得明会員の改革演説」という記事が運動の状況を伝えている。八月二四日から数日間、佐野正道も大谷派改革運動の演説に参加し、講壇にのぼった。二四日の演説会は愛知県津島町(現、津島市)の寿美喜座にて開催された。聴衆は二千人ほどが押し寄せ、「立針の地だになき迄に充滿し」入場することが出来ない。しばらくして千人ほどの者が帰った。改革運動の演説者は、横田惣次郎、遠島皆成、春田祐清、伊藤春太郎、佐野正道であった。会は弁士達の満腔の熱血を灑ぎ、本山改革の急務を痛論するなかで、怒濤の拍手喝采に包まれた。このような会が一度だけ開かれたのではない。連日のように各地を回って開かれたのである。一方、大会を妨害しようとする非改革派も数人潜入し紛擾を起こす場面も描かれている。非改革派の組織は顕光会と名づけられた組織であった。

#### 四、非改革派の顕光会、新改革派の登場

本山改革運動への反対の勢力も現れる。明治二四年四月二二日名古屋において顕光会という組織が設立した。本山寺務役員を中心とした保守組織で、改革運動に対抗しそれを鎮静化させるための組織である。顕光会の主張は、兄弟牆にせめぐことをやめ、本山と末寺が穏便に争わないことが最良であるという主旨であり、かれらは改革党を批判していった。中心人物は、後藤猪太郎、中村元亮、藤井仁三郎、宇佐美鎮雄、中山善昇などの名が『竜華空音日記』や新聞雑誌にあげられる。かれらは得明会の改革演説に乗り込み、質疑や批判をしていたことがわかる。『米之仏教』によれば非改革派は『東洋新報』という発行誌にその批判的主張を展開した。

また顕光会の組織とは別に新改革説を唱えるものも現れた。東京浅草の中山理賢、本多良観は得明会と接触し、龍華らの主張とは袖を分かち形で改革を唱えた。新聞『新愛知』は以下のように報道している。

#### 秩序的改革派

大谷派本山改革の神隊とも云ふべき東京の有志中山理賢本多良観の二氏は去る二五（※一五日カ？）日京都に赴き得明会派即ち龍華空音氏等のなす所を見て別に感ずることありしにや本山執事渥美契縁氏を始めその他の寺務役員に面役し秩序ある穩当なる改良説を提出したる処大に賛同を得。尚ほ右両氏は法主へも面謁の上種々事務上に関する将来の方針等を開陳した<sup>(26)</sup>り。

おそらく、かれらは得明会の主張のように寺務体制の大幅な変革を目指すものではなく、体制はそのまま改良

を促す穏便なものであったために、執事渥美契縁もそれを歓迎した。しかしそれで寺務所が改善したのかといえはかならずしもそうではない。それから数年後白川党が結局寺務体制の大幅な変革を主張せざるを得なかった事実を踏まえると、渥美契縁の改革案受理は現行の体制を温存することとなったといえよう。

## 五、京都における改革党大会から濃尾地震まで

九月一五日京都祇園有楽館において大谷派改革党大会が行われた。全国から有志の代表者が集結して、本山への請願や運動の方針について議論した。人数は報道によって異なるが、代表者三〇名前後の会議であったようである。まず発起人の佐野正道、龍華空音が演説する。会議は議長に北陸の雄上了岳、副議長に伊藤春太郎が着任し、本山に提出するための規約案などを議論する。その後懇親会が開かれ、翌日は、規約及び本山改正要領を議定して委員を選定して本山に請願書を提出することに決した。はじめの請願は一月一五日に差出すこととなり、最初は少数で請願書を提出に向かい、結果次第では全国の僧侶門徒の有志者を集めて改革を迫るという方針を決した。

改革党大会で決議した「本山事務改正要領」第一条には、「本山事務従来の弊習を洗淨し汎く門末の総会議を開き以て世論に決すべき事」<sup>(27)</sup>を第一に掲げている。「総会議」というものの性格は詳細にはわからないが、三つの仮説が考えられる。第一には、龍華をはじめ僧侶議員と信徒議員の会議を主張していたが、得明会で議論を詰める内に総会議という形を取るべきと変更になったということなのか。第二には、本山の改革が必要かどうかを総会という形でまず決するために総会議を開くべきと考え、以降改正が多数であった場合、末寺信徒議員の参加した議會制を導入したいと考えていたのか。第三には、総会議も、僧侶信徒の會議も同じものを想定していたのか、である。どれかは決しがたいが、しかしいずれの方針であったにせよ、本派西本願寺の宗政との関連もここには認められると

考えたい。つまり西本願寺は宗教の主権が、法主の一人にあるのではなく、末寺に租税を課すことで末寺の宗教参加、会議の招集が認められていたということを意識した主張であると思われる。<sup>(28)</sup> また、西本願寺は定期集会を開設し、収支予算を末寺総代により議定することをすすめて行っていた。<sup>(29)</sup> このような西本願寺の体制の影響という側面が伺われる。

次に改革要領の第二条には「興学普及の方針を確定し将来の振起を計るべき事」、第三条には「財務を整理し出納を明にすべき事」が掲げられた。

また得明会の規約には「着実篤行を旨とし秩序の運動をなすものとす」という運動者の秩序ある態度を重視していたが、寺務所側は過激改革論として退ける。龍華らに処分がくだるのは時間の問題であった。<sup>(30)</sup>

得明会は、佐野正道の寓所下河原鷺尾町を得明会本部とし、佐野正道と北陸越中の平野恵粹が京都での事務活動に専念した。北陸協会という団体を組織していた平野恵粹や上田晃澤、雄上了岳などの北陸系の改革論者は『同入海雑誌』という改革雑誌を発行した。<sup>(31)</sup>

改革党の会議の後、龍華空音や伊藤春太郎、雄上了岳は東京へ向かった。寺田福寿や三井銀行を訪問し、総理大臣兼大蔵大臣を務める松方正義へ直々に本山の財務について談判を迫るためである。松方伯への請謁書を呈した。全文は日記に記され、『日出新聞』（一〇月二二日）、『明教新誌』（二九七〇号、一〇月二六日）などにも掲載されている。

その後謁見がなかったかは定かではないが、ひとまず各自帰国し十一月一日の京都全国大会に備える準備に取りかかる。その間、寺務所は、九月二十九日、主唱者の龍華空音を除名とし、『同入海雑誌』の編集発行に携わった上田晃澤と、印刷人であった平野恵粹の二年の停班処分（年限を定めて僧位を停止する処分）を下した。佐野正道は自

ら還俗願を提出し、僧籍を除籍することになった。<sup>(32)</sup> 執事の渥美契縁は自ら地方に出張し、改革の気焰の鎮圧に取りかかった。

一〇月二八日、濃尾地震発生。龍華の自坊常德寺は、本堂全壊の被害を受けた。<sup>(33)</sup> 尾張地方からの改革への主導的関わりはここで中断を余儀なくされた。北陸では反って上田・平野への処分が反動を呼び、改革の声が強くなったという報道もある。例えばその状況を雑誌『第二国教』はこう報じている。

去る九月大谷派本願寺改革党员会議の席上に於て。全国の同党员大挙して本山に逼迫し。是非とも其の意志を貫徹せんと決定したる十一月十五日の期日も。少しの異変なく平穩に経過せしは。畢竟従来同党か其本城とも頼みたる濃尾地方震災の爲め。其気焰頓に消失して茲に至らず不得已一時途絶せしものならんと思の外。同党の運動は愈猛烈に赴き。客月十六日雄上了岳氏突然西京に至り何か打合する所あり。又た聞く他にも六七名の有志同時に着京し。各所に潜伏して只管本山の内情を探窺し。時機を待つて一時に勃興し其意志を果さんと欲するものの如く。孰れも一名にて七十名乃至一百名位の捺印せし請願書を携帯せしと聞及へり。<sup>(34)</sup>

この記事によれば、十一月一日の請願書提出は、地震の影響もあかなわなかったが、十一月六日には北陸協会の雄上了岳を中心に京都にて、改革有志者の集まりがあったことが記されている。

## おわりに

明治二四年改革運動は、宗門の役員の専横や財政紊乱を指摘し、財政や宗政の透明化のために僧侶と信徒の議会



制を主張した運動であり、自由民権運動の影響や帝国議会開設直後の機運と関連していると考えられ、その時代の象徴的な運動である。ただし龍華らの主張は、寺務所には過激な変革とされ受け入れられなかった。

その後の動向については今後の課題である。今わかっていることは、龍華や伊藤春太郎は明治二九、三〇年の清沢らいわゆる白川党の教団改革運動にも関係したことである。白川党の呼びかけが全国に広まり、各国上京委員が組織され、それに龍華も参加していることがわかる。<sup>(35)</sup> 明治三〇年三月一二日の在京委員懇話会では、龍華は東京の衆議院議員某氏（おそらく伊藤春太郎）と連携し、清沢満之らに東京の改革の動きを報告し、さらに本山の議制局を拡張して完全なる末寺・門徒会議を設置するための、本山との交渉を担当する委員としても活躍したことがわかる。<sup>(36)</sup> しかし龍華が白川党の運動に最後まで同調したかどうかはわからない。注目すべきは白川党の改革運動の最中の占部観順の真宗大学学監就任である。その占部の学監就任は教界に波紋を呼び、占部の異安心問題へと発展する。この学監就任により、改革派内の衝突が起り、白川党は占部を助け、龍華を支持するものは細川千巖を援助したとされる。<sup>(37)</sup> これによれば、龍華は占部の就任との関わりで、白川党から距離を置き始めたのかも知れない。その後、龍華は安心論の問答や講話を残している。<sup>(38)</sup> また龍華は、明治三四年擬講となり、明治三六年一二月三一日行年八〇歳で生涯を終えた。

龍華は、白川党の運動の時期にも、自身の改革信念であった門徒（信徒）と末寺の議会開設の志願を強く持つており、その志願は白川党の最重要課題でもあったと考えられる。さらに伊藤春太郎ともその時期にも連携をとっていたことがわかれた。

伊藤春太郎は、明治三〇年時には衆議院議員として国政に参加していた。白川党の井上豊忠は、同志のなかに社会的に有力な人士がいなかったことから、「有力者に接近してその理解と同情をえることの重要性を認識し」、「元老級



の大谷派僧侶と親交のある政府高官、末寺門徒の貴族院議員や衆議院議員に直接間接面会して革新の話をし<sup>(39)</sup>た。春太郎は代議士の五名の本山調査委員として参加し、大谷派門徒の代議士三五名の連署で一篇の建議書を法主に捧呈したとされる<sup>(40)</sup>。またその建議書の内容は「立法機関の独立<sup>(41)</sup>（すなわち完全なる末寺会議の設置）、財政機関の分立（すなわち門徒会議の設置）、および勸学布教の振興の三事であつた」とされる。春太郎は政治家として活躍をしながら、篤信の門徒としての本山への思いは、明治二四年時から継続されていた。

また、明治三十三年には春太郎は全国仏教徒中央集会所の主務委員として近角常観らが展開した宗教法案反対運動にも関係しており、同様に佐野正道も近角らの運動に参加した<sup>(42)</sup>。春太郎の晩年は、明治三九年の町村合併に伴い、稲沢町が誕生し初代町長に就任した。彼は町政の基礎確立と、町政発展のために努力した。その後も引続き三回にわたって稲沢町長に就任し、永年の政治経験を活かして活躍したが、大正二年三月一日町長在任中に享年五六歳で死去した。

最後に、明治二四年の改革運動は、その改革論を展開した新聞・雑誌だけでも、『時務日報』、『欧米之仏教』、『同入海雑誌』と少なくとも三つ数えることができる。龍華らの運動は、議會を設け、門徒と末寺の會議を請願し、開けた宗門へと改革し、また財政や寺務の紊乱を改正しようと試みた。門徒と末寺が共同で展開した初期の改革運動として評価できると考える。龍華らが主張した点も、清沢満之ら白川党の改革が、最も急務なこととして主張したのも末寺會議と門徒會議開設という共通点があった。龍華や白川党の改革運動ではその実現はかなわなかった。現在の大谷派は僧侶の議會としての宗議會、門徒の議會としての參議會からなる議會が、昭和五六年の新「真宗大谷派宗憲」施行により決定されて以降召集されている。実に龍華の構想から九〇年後にあたる。龍華らの運動は、受け入れられはしなかったものの教団の末寺信徒の歴史として見逃すことのできない重要な一幕である。

## 【凡例】

- 一、本論では、人物への敬称は省略した。
- 一、引用にあたり、片仮名表記はひらがな表記に変更した。
- 一、引用にあたり、くずし字、変体仮名、合字は通行の字体に改めた。
- 一、引用にあたり、読みやすさを考慮して、句読点を補った。
- 一、『竜華空音日記』の引用にあたり、同日記には頁数がないので、頁数は筆者が便宜的に付したものである。最初の右側の頁に「心得」とあり、左側に「開明」とある。その右側を一頁、左側を二頁とし、以降の頁はそれに順じて付していった頁数を本論で用いている。
- 一、出典の「巻」、「号」は省略して表記した。

## 参考文献

## 【一次資料―龍華空音著作】

- 『竜華空音日記』（同朋大学所蔵複写版）一八九〇～一八九二年。
- 一岡利市編『龍華空音 山本喜代松 安心問答筆記』一岡利市、一九〇〇年。
- 『たすけ玉への断案』法蔵館、一九〇一年。

## 【一次資料―新聞】

- 『愛国新報』愛国新報社、（一八九〇年、東京大学明治新聞雑誌文庫所蔵マイクロ版閲覧）。
- 『教学報知』教学報知社、（一八九七年、大谷大学所蔵マイクロ版閲覧）。
- 『金城新報』金城新報社、（一八九〇～一八九一年分、愛知県図書館所蔵マイクロ版閲覧）。
- 『新愛知』新愛知新聞社、（一八九〇～一八九一年分、双光エシックス縮刷版閲覧）。
- 『中外電報』中外電報社、（一八九一年分、京都府立図書館所蔵マイクロ版閲覧）。
- 『配紙』宗報等機関誌復刻版、東本願寺出版、一九八九年。
- 『扶桑新聞』扶桑新聞社、（一八九〇～一八九一年分、愛知県図書館所蔵マイクロ版閲覧）。

『本山報告』宗報等機関誌復刻版、東本願寺出版、一九八九年。

『日出新聞』日出新聞社、(二八八九、一八九一年分、京都府立図書館所蔵マイクロ版閲覧)。

『明教新誌』明教社(高野山大学付属高野山図書館監修『明教新誌』(CD-ROMに収録版) 小林写真工業、二〇〇三年閲覧)。

#### 【一次資料—雑誌】

京都悟真協會編輯部編『仏教新運動』悟真協會編輯部、一八九一年。

佐野正道編『欧米之仏教』第五・六卷、朝陽館、(一八九一年分、東京大学明治新聞雑誌文庫所蔵マイクロ版閲覧)。

教界時言社編『教界時言』教界時言社、一八九七年。(『真宗史料集成—真宗教団の近代化—』第二二卷、一九七五年)。

國教雜誌社編『國教』國教雜誌社、一八九〇—一八九一年。(中西直樹編『雑誌『國教』と九州真宗』不二出版、二〇一六年)。

佛教徒國民同盟會編『政教時報』佛教徒國民同盟會出版部(岩田文昭研究代表、科学研究費補助金基盤研究C・研究課題番号二

〇五二〇〇五五 研究成果報告書『近代化の中の伝統宗教と精神運動—基準点としての近角常観研究—』付属DVD—ROMより閲覧)。

#### 【二次資料】

愛知県議会議事事務局編『愛知県議会議史』第二卷(明治篇中)、愛知県議会議事事務局、一九五七年。

朝日新聞・名古屋社会部編『明治・東海政治史』六法出版社、一九七五年。

暁烏敏全集刊行会編『暁烏敏全集』第八卷、涼風学舎、一九七七年。

稲沢市史編纂委員会編『郷土の人物誌』稲沢市教育委員会、一九八四年。

大谷大学編『清沢満之全集』第七卷・第八卷、岩波書店、二〇〇三年。

尾野好三編『成功亀鑑』大阪実業興信所、一九〇九年。

佐藤哲朗『大アジア思想活劇—仏教が結んだ、もうひとつの近代史—』サンガ、二〇〇八年。

真宗大谷派教師養成のための教科書編纂委員会編『教団のあゆみ—真宗大谷派教団史—(改訂版)』東本願寺出版、一九九五年。

諏訪義談『尾張教学先覚伝考』光文堂、一九七四年。

長谷川昇『博徒と自由民権—名古屋事件始末記—』平凡社、一九九五年。

立田村史編さん委員会編『新編 立田村史 資料』立田村、一九九九年。

花園一実「頓成の真宗学」『現代と親鸞』第二五号、二〇一二年。

本願寺史料研究所編『本願寺史』第三卷、浄土真宗本願寺派宗務所、一九六九年。

水島見一『近・現代真宗教学史研究序説―真宗大谷派における改革運動の軌跡―』法蔵館、二〇一〇年。

森岡清美『真宗大谷派の革新運動』吉川弘文館、二〇一六年。

山本伸裕「清沢満之とその時代―一人を見失わない―」「不安に立つ「時代に抗った念仏者」―一人を見失わない―」真宗大谷派

名古屋教務所、二〇一七年a。

山本伸裕（口頭発表資料）「大谷派革新運動の濫觴―龍華空音と清沢満之―」「日本近代仏教史研究会 吉田久一基金研究プロジェクト 仏教思想を中心とした日本近代思想史の再考」、二〇一七年b。

## 註

(1) これまでの研究成果として、吉田久一や池田英俊、柏原祐泉の研究の成果等が、明治仏教史や教団史研究で重要であることは言うまでもない。また近年では森岡清美『真宗大谷派の革新運動』という大著が井上豊忠を中心に真宗大谷派の革新運動について描いている。また明治から戦後の同朋会運動へと展開する教団改革史に着目した研究として、水島見一『近・現代真宗教学史研究序説―真宗大谷派における改革運動の軌跡―』という大著があげられる。大谷派の教団史としては、『教団のあゆみ―真宗大谷派教団史―』などがあげられる。

(2) 近年この運動について山本伸裕は口頭発表を行っている。山本伸裕「大谷派革新運動の濫觴―龍華空音と清沢満之―」（日本近代仏教史研究会「吉田久一基金研究プロジェクト 仏教思想を中心とした日本近代思想史の再考」、二〇一七年）を参照した。

(3) 実家の神守家には龍華の六歳年上の兄の神守空観かみもりくわんがいる。神守空観は明治初期には、石川舜台、渥美契縁とともに寺務所の中枢を担う三人の議事の内の一として大谷派を支える活躍をした（山本二〇一七a）。宗学者としても、明治四（一六六）年に擬講となり何度も学寮の講者として出講した記録が残される。明治九年には上海において「江蘇教校」の開設に関わり、東本願寺の初期の海外（大陸）布教の重任を背負った。明治一六年より一七年には鹿児島島の地の教開に尽力した。明治三二年七二歳で、布教と教学興隆に捧げた人生を終えた。神守空観についてはほとんど研究されていないが、諏訪義謙『尾張教学先覚伝考』の「神守空観師の渡支」は神守の人生を端的にまとめた先駆的研究である。しかし、神守の思想形成や、

養源寺に残る大量の講録、日記、上海において収集した資料などの分析は今後の課題である。初期の開教史や明治期の宗学思想を知る上で重要な資料群といえる。

- (4) 暁島敏によれば、明治一〇年、龍華は清沢(徳永)満之に育英教校への入学を進め、清沢は翌年そこへ入学したといわれる(『暁島敏全集』八、四六四頁)。確かに育英教校という本山の学術エリートへの入学にはこの地方の宗学の有力者であった人物からの紹介があったというほうが違和感はないであろう。少なくとも清沢の住所録には早尾の龍華空音の名が挙げられ親交があったことがわかる(『清沢満之全集』八、三三五頁)。

- (5) 『龍華空音日記』(空音の名字は龍華という漢字表記のようであるが、同朋大学所蔵の日記の名称が「竜」の字を使用している)のでそのまま表記した)には、明治一九年、名古屋別院にて当時嗣講であった細川千巖が「占部は頓成門人にして生涯本筋へ出ること能はざるものなりといはれた」(『龍華空音日記』六頁)という龍華の記述がみられる。頓成(一七九五―一八八七)は、江戸末期の宗学者であり、異安心調理にかけられ処分を受ける。その後、幕府の裁定により流罪を受け、明治維新まで罪が解けなかった。明治初期にも安心調理を受けるも、結局最後まで自説を曲げることなく、明治二〇年に没したかれの教学理解の斬新さや何があっても自説を曲げない態度について、いくつかの研究がなされている(近年の研究では花園一実「頓成の真宗学」(『現代と親鸞』二五、二〇一二年)を参照)。

ところで龍華は、香月院深励の系譜こそ正當な宗学であり、正義であると考えていた。自身が、江戸末期から、その学びによって、多くの門徒を教化してきたという自負があったのだろう。この宗学信念の墨守に立つ龍華は、意見の対立を避けることをおそれず、雲烟過眼の心境で問題に意見するのだった。そういった龍華の姿勢は、後に改革の声を挙げるところでも同じである。

- (6) 龍華は幾度も賞罰褒貶を受けている。明治一三年の一等教授の職務差免だけでなく、明治二三年一月六日五等学師褫奪、役務差免、住職差免。改革運動を主唱したことによる明治二四年の除名処分。そして、巡り巡って明治三二年学師、最晩年の明治三四年には擬講となる。これほど本山から幾度も処罰を受けたり、反対に賞与を受けたりと浮き沈みのある人物は珍しい。

- (7) 『龍華空音日記』七―八頁。

- (8) そのことは雑誌『国教』(『国教』六、明治二四年二月二五日)の報道「付帯の原因」によっても確認することができる。龍華が本山を訪れたとき、本山寺務所に「猥褻なる枕絵草紙」をふと発見した。このことも、改革運動の「付帯の原因」、つまり改革の引き金の一つであろう。さすがにこれを本山も問題として罰したが、龍華はこのような現実を突きつけられたのだ

った。

(9) 『竜華空音日記』 一一頁。

(10) 『竜華空音日記』 一一頁。

(11) 『竜華空音日記』 一七頁。

(12) 『竜華空音日記』 二七頁。

(13) 『竜華空音日記』 三七頁。

(14) 『竜華空音日記』 四一、四三頁。

(15) 『郷土の人物誌』 一頁参照。

(16) 『新愛知』(明治二十四年五月一日)。

(17) 『竜華空音日記』の六九頁には「伊藤春太郎氏が発行」とある。また名古屋の『金城新報』は何度も『時務日報』について取り上げている。『新愛知』に「時務新報」と記されるのは誤記である可能性が高い。

(18) 庄林については『明治・東海政治史』(一三五―一四〇頁)を参照した。

(19) 明治二十四年九月九日の『新愛知』(名古屋)によれば、「県会議員伊藤春太郎龍華空音の両氏が西京へ行く途中に要し暴行を加へんと企つ。宜しく数一〇名の壮士を引率せざるべからずと。然るに一方は曰く改革派は暴力を以ても其意を達せんとするは無法なり。我々は宜しく穏当なる手段に由り之を矯正せざるべからずと。何れが虚にして何れか実なる」と、両極の噂が立てられた。明治二十四年九月一二日の新聞『新愛知』(名古屋)によれば、京都での改革運動会議のために龍華らが発した時に、壮士を携えて出発したとされている。以下の記事である。「大谷派改革大集會に付得明會員龍華空音伊藤春太郎の両氏は壯士八九名を随へ一兩日前京都へ出發。又非改革派頭光會員中山善昇氏は去九日後藤猪太郎氏は一昨十日何れも出發の由」。また明治二十四年九月一〇日『仏教新運動』二〇(京都、悟真教會編輯部)は浄土宗系の雑誌であるが、その雑誌によれば龍華ら得明會の運動は「壯士的の挙動なきか。彼等は權謀、詐術、離間、纒誣、罵詈謗の邪氣毒瘴に其身辺を填充しつつ非ざるか。彼等の所謂改革とは果して宗教家の改革なるか。東洋流なる豪傑風の改革には非るか」と、宗教者の運動としての品格を問題とする雑誌も存在した。

(20) 『竜華空音日記』 六九、一〇二頁。

(21) 『竜華空音日記』 七八頁。

(22) 『日出新聞』(明治三十二年二月一〇日)。

- (23) 『欧米之仏教』の三、四号は全冊を確認することはできていない。第三号は国文学研究資料館の「近代書誌・近代画像データベース」で目次などを確認出来るが、全冊は保管されていない。その第三号目次に「東本願寺」という論説をみるようになる。第四号は不明であるが『竜華空音日記』に第四号の一部と考えられる記事が記されている。
- (24) 『竜華空音日記』六七～六九頁。
- (25) 『竜華空音日記』四七～四八頁。
- (26) 『新愛知』(明治二十四年九月二二日)。
- (27) 『日出新聞』(明治二十四年九月一七日)。
- (28) 西本願寺は明治一三年に集会規則を制定し、翌年から定期集会が招集されている。また「大谷派改革請願の二条」『日出新聞』(明治二十四年九月二三日)の記事のように、西本願寺と東本願寺の宗政の対比を論じている一般紙の記事があり、そこからおそらく西本願寺と東本願寺の体質の違いは広く知られていたと推測することができよう。
- (29) 『総末寺会議』『扶桑新聞』(明治二十四年一〇月九日)。
- (30) 『日出新聞』(明治二十四年九月一七日)。
- (31) 『同入海雑誌』は現存が確認できていない。『同入海雑誌』の存在は、『本山報告』七五(明治二十四年九月三〇日)の改革運動者処分の記事に現れる。また『明教新誌』二九七三(明治二十四年十一月二日)の記事にも「入海雑誌の発行人平野」と『同入海』ではないが『入海』と名があがっている。
- (32) 『本山報告』七五(明治二十四年九月三〇日)。また『明教新誌』第二九七三号(明治二十四年十一月二日)には、佐野正道が依願奪班したと記される。
- (33) 『新編 立田村史 資料』一一二～一一三頁。
- (34) 『第二国教』三(明治二十四年二月)、二八頁。
- (35) 『教界時言』四(明治三〇年一月二八日)、『真宗史料集成』一一、五〇三頁。山本二〇一七a、三三頁。
- (36) 『教界時言』六(明治三〇年四月二九日)、『真宗史料集成』一二、五四九～五五五頁。
- (37) 『教学報知』一(明治三〇年一〇月一日)。
- (38) 『龍華空音』山本喜代松 安心問答筆記 一岡利市、一九〇〇年。『たすけ玉への断案』法蔵館、一九〇一年。
- (39) 森岡二〇一六、二六四頁。
- (40) 森岡前掲。

(41) 『教界時言』六(明治三〇年四月二九日)。「真宗史料集成」一二、五六三頁。森岡二〇一六、二六五頁。  
(42) 『宗報』一九(明治三三年二月一三日)、二四頁や、『政教時報』二六(明治三三年二月一三日)、一五、一七頁を参照。

(大谷大学任期制助教 真宗学)

〈キーワード〉東本願寺、欧米之仏教、清沢満之